目立て職人

（宮腰目立加工所）

宮腰　光　人さん

師匠を真似て覚えた弟子時代

どんなに素晴らしいものでも、鋸は使うとすぐに摩耗してしまいます。目立てとは切れ味の悪くなった鋸を研ぎ、アサリを修正して、切れ味を復活させる仕事です。

昭和25年、中学を卒業と同時に宮腰さんは市内の木材会社に入りました。そこで、自転車で鋸を運ぶ仕事をするうちに、丸太と格闘するよりも目立てのほうが自分の小さい体に合ってると思い、目立ての道に入りました。

師匠は、口で教えてくれなかったため、普段、師匠がやることを、真似しながら仕事をしました。技術以外でも真似ることが多かったそうです。

「そのころは、技術は、簡単に外に出さないという世の中だったため、目立て場に知らない人は入れませんでした。当時は、本もなく、目立ての情報が手に入りやすくなったのは、弟子を終わってからです」。

壁を越えるのに10年

見習いを終えてからは、毎日、朝6時前の汽車に乗り、津軽のほうで4年間、仕事をしました。

「そのころ、仕事で壁に当たり、常に頭の中からその事が離れませんでした。師匠が早くに亡くなり、兄弟弟子に聞けるような環境でもありませんでした。鋸のあさりを出す機械の調整方法だったのですが、乗り越えたのは10年も経ってからです。ある時、ふっとひらめくものがありました」。

今は人も仕事も減りました

宮腰さんの現在の仕事は、帯鋸の研磨が主体となっています。帯鋸とは、1周が数メートルにもなる製材所などで木材加工機械に使用する工業用の鋸で、機械を使って研ぎます。

研ぐ音で仕上がりがわかるそうで、ひとつの帯鋸を、だいたい15～20分で仕上げるそうです。

「昔は木材会社だけで何千人も働き、目立てだけで200人もいました。仕事も朝から晩までありました。今は同業者も少なく、仕事は半日で終わります。やめようと思った時もあったほどです」。

帯鋸に技術が現れます

どういう木を切るかによって、帯鋸の厚みや刃の間隔が違ってきます。メーカーからは、鋸の元となる150～200メートルの薄く長い鉄板がコイル状になって届きます。始めに、それを注文元の木材加工機械に合うように、幅や長さを切断します。次に鋸の刃をつくり、最後に帯状になるように溶接します。

どの工程もしっかりやらないと、鋸の強度が落ちたり、あとで研磨がうまくできなかったりします。冬期間は木が凍ってしまうため、鋸が精巧にできてないと、あさりを小さくしても引けなくなってしまいます。

「高価な機械を置いている人は、やり方が違いますが、鋸に対する基本的な考え方は今も昔も同じです。機械化が進んでも最後に鋸を作るのは目立て屋です」。

使う人の評価が一番です

作業するうえで最も大事に思っているのは、仕上げたものが使用に耐える完璧なものであること。ほかの業種の職人は作ったものが残りますが、目立ての仕事は外見からは判断できません。実際に鋸を使っている人の評価を最も大事にしています。

この仕事には『これは俺しかできない』という誇りや満足感を感じています。

「新しい機械がどんどん出てきますが、それに負けるとは思いたくありません」。

人の感覚や判断力にはすごい力があると宮腰さんは信じています。

作る刃の形はすべて微妙に異なる。どんな木を切るかで刃の形を調整する。